編集後記

このたびの『立命館平和研究』にご投稿いただいた論文は、まさにこれから私たちが転換期のミュージアムの方向性やあり方を模索していく上で、大事なご提案やご示唆を頂いた論文であると思います。

安斎育郎教授の「大学における学生参加型『平和学』講義の試み」はこれまで培われてきた安斎平和学のより具体的な実践的、実証的平和教育理論構築にむけた豊富なアイデア（経験智）を知る上で興味深い論文であります。

藤岡惇教授の「原爆の体験学習・対話・参画が日米の学生をどう変えたか」も、同様に、アメリカン大学生と立命館大学生との交流事業を通じての平和教育モデルが提示されています。

歴史学の専門家として本ミュージアムのリニューアルに携われた福島在行氏の「平和博物館と／の来歴の問い方」は、改めて、「平和博物館」とは何であるかを根本的に問いかけています。

山根和代氏の論文「ヨーロッパ平和運動の母ベルタ・フォン・ズットナーの業績に関する展示の今日的意義」は、ノーベル平和賞を受賞した最初の女性の生き様から今日私たちが何を学ぶことができるかを提起しています。

アジアの今後の平和社会構築の問題に関しては、君島東彦教授の「東アジアの平和と日本国憲法」の中で、改めて「平和主義」からみた日本国憲法の価値の重要性が問われています。

佐藤史郎氏の論文「NPTにおける不平等性と積極的安全保証の論理」は核拡散防止条約の内実や矛盾を丁寧に整理しながら、現代的課題である核軍縮のあり方が論究されています。

構造的暴力としての環境破壊の問題と国際平和に関しては、池谷りさ氏の「日本のエコツーリズムの現状と課題」が読み応えのある論述になっています。私は平和や福祉には３Ｋ（「健康」、「環境」そして「観光」）の総合的視点が必要であり、このエコツーリズムはまさにこれからの重要な平和学や福祉学のテーマになると思っておりました。

来年秋の「第６回国際平和博物館会議」にむけて、浅井基文氏の「平和研究機関ネットワーク構想」は筆者の平和研究機関でのご経験からの示唆に富んだ論述が展開されています。

拙稿「国際福祉と平和研究・教育の重要性」は平和学と福祉学の合流を模索したものです。

このように今回ご投稿いただいた論文はまさしく多様な分野からなりたっておりますが、これこそ平和学がめざす価値の多様性と統合性を物語っています。

今後ともより充実した論集にしていくために何とぞ皆様方のご支援とご投稿を心からお願い申し上げます。

（立命館大学国際平和ミュージアム副館長　桂　良太郎）

立命館平和研究

—立命館大学国際平和ミュージアム紀要—

第8号

発　行　日　2007年3月13日

編集・発行　立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1

電話　075-465-8151

FAX　075-465-7899

印　　刷　佐川印刷株式会社

©立命館大学国際平和ミュージアム